



TOKYO PHILHARMONIC ORCHESTRA

2022シーズン定期演奏会

東京フィルハーモニー交響楽団

2022

9



A seat reserved just for you
chie (d.)



©上野隆文

本日はご来場いただき、まことにありがとうございます
オーケストラの響きが満ちる場所でのかけがえのないひとときを
心ゆくまでお楽しみください

東京フィルハーモニー交響楽団

オフィシャル・サプライヤー

SONY

Rakuten 25
YEARS

マルハニ

LOTTE

ゆうちょ銀行

公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団は上記の企業から特別なご支援をいただいております。

第149回東京オペラシティ定期シリーズ

9月15日(木)19:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

第974回サントリー定期シリーズ

9月16日(金)19:00開演 サントリーホール

第975回オーチャード定期演奏会

9月19日(月・祝)15:00開演 Bunkamura オーチャードホール

9/15

9/16

9/19

指揮：アンドレア・バッティストーニ

コンサートマスター：近藤薫

リスト＝バッティストーニ編：

『巡礼の年』第2年「イタリア」より「ダンテを読んで」（約18分）

－ 休憩（約15分）－

マーラー：

交響曲第5番 嬰ハ短調（約70分）

第1部

- I. 葬送行進曲：正確な速さで。厳粛に。葬列のように
- II. 嵐のように荒々しく動きをもって。最大の激烈さをもって

第2部

- III. スケルツォ：力強く、速すぎずに

第3部

- IV. アダージェット：非常に遅く
- V. ロンド・フィナーレ：快速に、楽しみに

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）|

独立行政法人日本芸術文化振興会

協力：Bunkamura (9/19)



※演奏中や曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。

※開演間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なるお席への着席をお願いすることがございます。

※演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。

※終演後、ロビーの混雑を避けるため「時差退場」のお願いをしております。ご協力をお願いいたします。

出演者プロフィール



©上野隆文

指揮

アンドレア・バッティストーニ

Andrea Battistoni, conductor

東京フィルハーモニー交響楽団 首席指揮者

1987年ヴェローナ生まれ。国際的に頭角を現している同世代の最も重要な指揮者の一人と評されている。2013年ジェノヴァ・カルロ・フェリーチェ歌劇場の首席客演指揮者、2016年10月東京フィル首席指揮者に就任。

『ナブッコ』、『リゴレット』、『蝶々夫人』（二期会）、グランドオペラ共同制作『アイダ』のほか、ローマ三部作、『展覧会の絵』『春の祭典』等数多くの管弦楽プログラムで東京フィルを指揮。東京フィルとのコンサート形式オペラ『トゥーランドット』（2015年）、『イリス（あやめ）』（2016年）、『メフィストフェレ』（2018年）で批評家、聴衆の双方から音楽界を牽引するスターとしての評価を得た。同コンビで日本コロムビア株式会社よりCDのリリースを継続している。

スカラ座、フェニーチェ劇場、ベルリン・ドイツ・オペラ、スウェーデン王立歌劇場、アレーナ・ディ・ヴェローナ、バイエルン国立歌劇場、マリインスキー劇場、サンタ・チェチーリア国立アカデミー管、イスラエル・フィル等世界の主要歌劇場・オーケストラと共演を重ねている。2017年には初の著書『マエストロ・バッティストーニのぼくたちのクラシック音楽』（音楽之友社）を刊行。

2021年、東京フィルとの録音『ドヴォルザーク新世界&伊福部作品』欧米盤が欧州の権威ある賞の一つ「OPUS KLASSIK 2021」交響曲部門（20-21世紀）を受賞した。

Website <http://www.andreabattistoni.it/>

Facebook <https://www.facebook.com/Andrea-Battistoni-159320417463885/>

楽曲紹介

解説＝野本由紀夫

今月の定期について

今月の指揮者アンドレア・バッティストーニは、初物尽くしである。マーラーの交響曲第5番を東京フィルで指揮するのは、今回が初めてである。

それと同じぐらい期待されるのが、バッティストーニの編曲の世界初演である。ピアノの巨匠フランツ・リストのヴィルトゥオーゾ作品（超絶技巧曲）を、オーケストラ編曲した本人が指揮をする。これまでも何度か彼の管弦楽作品は東京フィルで取り上げられてきたが、とりわけ昨年（2021）11月の定期でフルート協奏曲『快樂の園～ボスの絵画作品によせて』を自作自演したことは記憶に新しい。今回も、彼がオーケストレーションに通じていることを、改めて見せつけるに違いない。

バッティストーニによれば、今回の選曲には「隠しテーマ」があるという。それは、「暗闇・絶望」から「光・希望・新たな生命」に至るまさに「再生」だという。この困難な時代にこそ、期待の定期演奏会である。

リスト＝バッティストーニ編

『巡礼の年』第2年「イタリア」より「ダンテを読んで」

ごく一般的なイメージからすると、フランツ・リスト（1811-1886）はショパン（1810-1849）とも大親友だった「ピアノの魔術師」「史上最高のピアニスト」という認識かもしれない。しかしリストは、「標題音楽（Programmusik）」という概念を1855年に打ち立て、19世紀に唯一新しく生まれた形式である「交響詩」の創始者として、諸民族の独立運動に「音楽的手段」を与えて、世界史に大きな影響を残した大人物だった。

ピアノ独奏曲集『巡礼の年』は4集からなり、それぞれ「第1年：スイス」「第2年：イタリア」「第2年補遺：ヴェネツィアとナポリ」「第3年」である。しかし、最晩年に作曲された「第3年」を除くと、最初の3集はリストがヴィルトゥオーゾ（超絶技巧の）ピアニストだった20代後半に書き始められ、ピアニストを引退して作曲・指揮に専念した1850年代に根本的に書きなおされた。原曲の「ダンテを読んで」

「ソナタ風幻想曲」は、ピアノ業界では「ダンテ・ソナタ」と通称され、演奏会やコンクール映えする作品として、取り上げられる機会もずば抜けて多い。パッティストーニがオーケストラ用に編曲したことにより、一種の交響詩として聴くことも可能だろう。

リストは1830年代、愛人となったマリー・ダグー伯爵夫人(1805-1876)といっしょにダンテ・アリギエーリ(1265-1321)の『神曲』(Divina commedia)を何度も読み返している。後にリストは、合唱・独唱付きの「ダンテ交響曲」も書くぐらいだから(1855-56)、『神曲』には相当大的な感銘を受けたようだ。その第1部「地獄篇」(1304-08頃成立)に書かれた恐ろしい情景、淫乱、憎悪、苦痛の状態から受けた強烈な印象を、いわば**音楽による読書感想文**として作曲したのが「ダンテ・ソナタ」である。「ダンテを読んで」というタイトルは、ヴィクトル・ユゴー(1802-1885)の詩集『内なる声』(Les voix intérieures)の第27番の詩のタイトルから取られた。したがって、音楽は筋書きを追っていない。

以下パッティストーニ編に基づいて解説する。序奏主題は、金管楽器群の「タター」という前打音リズムが特徴的で、「**地獄門の動機**」とも呼ばれる。響きは、中世以来「**悪魔の音程**」と呼ばれる三全音音程(ピアノの鍵盤で数えると、黒鍵を入れて7つ分の音程)であり、まさに「地獄篇の始まり」だとわかる。

ほどなく、弦楽器主体の主要主題が静かに始まる。盛り上がりを見せると、ハープのグリッサンドも交えた推移部となり、管楽器群が**ff**で吹奏する嬰へ長調の「**救済の動機**」(副主題)になる。弦楽器群は、3連符で滝のように下る音型で伴奏している。ちなみに、嬰へ長調は伝統的に、天国や昇天を表すときに使われてきた調である。

それがいったん静まると、ハープ伴奏に乗って、ヴァイオリン独奏で愛に満ちた音楽が奏でられる。ここはダンテの『神曲：地獄篇』に登場する「**フランチェスカ・ダ・リミニ**」の**愛の悲劇の情景**ではないか、ともいわれてきた。パッティストーニも、次ページ特別寄稿にあるように、この中間部のカンタービレに「不幸な恋人たち、パオロとフランチェスカの物語」を見いだしている。

徐々に音楽の音量と勢いが増していくと、展開部となる。今までに出てきたモチーフ(リズムや主題)すべてが断片的に組み合わせられていく。再び「地獄門」のモチーフが鐘(チューブラーベル)で登場すると、再現部である。ハープとヴァイオリン群の静かなトレモロで「救済の動機」が現われると、終結部となる。

最後は全楽器による勇壮な響きとなって、曲は閉じられる。

【作曲年代】第1稿1837年ごろ／改訂稿1849年 【編曲年代】2021年 【原曲初演】1839年、ウィーンにて、作曲者本人のピアノ独奏による 【編曲初演】2022年9月15日、東京にて、編曲者本人の指揮、東京フィルハーモニー交響楽団の演奏による

【編曲楽器編成】フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンド・シンバル、タムタム、チューブラーベル、グロックンシュピール）、ハープ2、弦楽5部

【特別寄稿】

アンドレア・バッティストーニが語る「ダンテを読んで」

アンドレア・バッティストーニ／訳＝井内美香

リストのピアノ音楽をよく知る者にとって、ハンガリー出身のこの作曲家が、珍しい響き、今までにない音色、オーケストラのプロットを鍵盤楽器で模倣する書法を追い求めたことは有名である。

「ダンテ・ソナタ」とも呼ばれるこの曲に魅せられた私は、それゆえに、管弦楽版を書くにあたって、これらの特徴を明確に示そうと決めた。この編曲は、1950年代ごろまで大いに流行していたオーケストラ編曲の例に連なるものとなる。すなわち目標とするところは、リストや彼の同時代人のスタイルによるオーケストレーションではなく、ラヴェル、レスピーギ、スコフスキーなどの先例に多くを負っている、大オーケストラのための自由な編曲なのだ。

だがあらゆる編曲は、その性質上、敬意を示す行為であると同時に、裏切りでもある。

リストによる速度記号と表現記号は全てそのまま残したが、それは作曲者の意図に敬意を表するためであり、この翻案の出来得るかぎりの完全なヴィジョンを提供するためだ。一方、メトロノームの指示は筆者のものであり、この作品の管弦楽版の演奏に、より適していると判断した内容になっている。

リストのピアノリズムを交響楽の語彙に編曲するための音色の調合についても同様である。文献学、書かれた記号、そして原典への忠実さを非常に重視している今日の音楽界において、この作品が原曲主義者たちの気分

をあまり損なうことなく、過去の偉大な作曲家への心からの捧げものとして居場所を見つけられるよう願っている。

リスト自身も、他の作曲家たちの音楽の編曲とパラフレーズを数多く手がけており、その中で、原作品への賛美と自身の解釈を組み合わせ、元の作品の魅力を再創造したという事実は、私を励ましてくれる。私を非常に惹きつけるのはやはり、このピアノの幻想曲の、神秘的で同時に苦しみをたたえた雰囲気であり、リストの天使的かつ悪魔的な音楽を見事に特徴づける、瞑想とヴィルトゥオジティ(超絶技巧性)の二項式なのである。リストがこの作品を作曲するにあたり、ダンテ『神曲』の中のどの〈歌〉にインスピレーションを受けたのかは定かではないが、恐ろしい音の波間に地獄の炎を、もしくは、中間部のカンタービレに不幸な恋人たち、パオロとフランチェスカの物語を見出すことは難しくない。

冒頭の威嚇的なモットーは、こう歌っているかのようだ。「ここに入る者は、いかなる希望も捨てよ」、これは地獄の門の上に記された銘である。ここから、オーケストラの深淵へ、もしくは、ダンテが地獄篇で描写した〈環〉の深みへ、蛇のとぐろのように曲がりくねった半音階主義の螺旋を辿る、暗い下降が我々を待っている。

リストの特徴は、すでに言及したように、聖と俗の両方を備えていることだ。天使的なコラルに伴うトレモロから、天国の気配を感じるのはたやすいし、今述べた地獄への下降を対位法で彩るカンカンに似た舞曲からは、硫黄の悪臭が感じ取れる。だが私は、悪の深淵へのダンテの旅の終わりと、天の高みへ、そしてより良き世界の希望へと至る道行を、高らかな鐘の音と共にげるフィナーレがとても気に入っているのだ。

マーラー

交響曲第5番 嬰八短調

グスタフ・マーラー(1860-1911)が20世紀に作曲した、最初の交響曲。

この曲の作曲に着手した1901年は、40歳のマーラーにとって人生の転機だった。**彼の本職はウィーン宮廷歌劇場の総監督**。彼はウィーン・フィルの首席指揮者も兼務しており、**世界的な超一流指揮者**だった。その激務から健康を害するのも無理はない。1901年3月には持病の持から命に関わるほどの大出血を起こし、3回目の手術を受けた。もともと批判的だったウィーンの強い風当たりはさらに悪化し、彼は**ウィーン・フィルを辞任**した。



アルマ・シントラーの肖像写真

9/15

9/16

9/19

それでも彼は、宮廷歌劇場の総監督は辞めなかった。その仕事の合間を縫って交響曲第5番のスケッチをはじめたが、同年11月10日の日曜日、マーラーは運命の出会いを果たす。**アルマ・シントラー**(1879-1964)との出会いである。アルマは22歳、マーラーは41歳だった。お互い一目惚れし、そのわずか1ヶ月後の12月には婚約、翌年3月9日に電撃結婚した。世界的指揮者と美貌の才女との結婚は、まさにスキャンダルであった。

交響曲第2番から第4番までの3曲が、歌曲集『子供の不思議な角笛』に起源をもつ「声楽付き」交響曲であったのに対し、第5番から第7番の3曲は、「**純粋器楽**」の交響曲だ。第5番も、とくに文学的なプログラムはもっておらず、自作歌曲ともほとんど関係ない。彼の創作史にとっても、転換点となった交響曲といえる。

この曲で、既存の形式図式は換骨奪胎。**大きく見れば、「葬送」から「勝利」への流れが認められるが**、ベートーヴェンの「苦悩から勝利へ」とはずいぶん面持ちが異なり、むしろ**パロディ**といってもよいだろう。

第1部

第1楽章(葬送行進曲) 次の第2楽章への、長大な「序奏部」の機能を果たす楽章。荘重な葬送行進曲である。

第2楽章 ソナタ形式の楽章。アルマによれば「マーラーの自我と世界との激しい戦い」だという。

第II部

第3楽章〈スケルツォ〉 ホルン協奏曲と呼びたいほど、ホルンのソロが活躍する。

第III部

第4楽章〈アダージェット〉 マーラーと親交のあった指揮者メンゲルベルク(1871-1951)によれば、この切なく美しい〈アダージェット〉は、「マーラーの、アルマにあてた愛の証」だという。ヴィスコンティ監督が映画『ヴェニスに死す』(1971)のBGMとして用いて、世界的に大ブレイクした。

第5楽章〈ロンド・フィナーレ〉 ロンドと題されているがフーガが6回も挿入されていて、マーラーのバッハ体験が如実に感じ取れる。

【作曲年代】1901～1902年 【初演】1904年10月18日、ケルン、ギュルツェニヒ管弦楽団の演奏、作曲者自身の指揮による

【楽器編成】フルート4(ピッコロ2持ち替え)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン持ち替え)、クラリネット3(変ホ管クラリネット、バスクラリネット持ち替え)、ファゴット3(コントラファゴット持ち替え)、ホルン6、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(小太鼓、大太鼓、シンバルを固定した大太鼓、トライアングル、シンバル、グロッケンシュピール、タムタム、ホルツクラッパー)、ハーブ、弦楽5部

のもとゆきお(指揮・音楽学)／桐朋学園大学助教授を経て、玉川大学芸術学部教授。毎年1000人の『第九』を指揮。NHK「ららら♪クラシック」、Eテレ学校番組「おながくブラボー」番組委員をはじめ、「又吉直樹のヘウレーカ!」や「世界で一番受けたい授業」ほかに出演。現在、NHK-FMラジオ「オペラ・ファンタスティカ」レギュラー解説員。全音楽譜出版社より詳細な解説・分析付きの「リスト原典版楽譜」を7冊刊行。

The 149th Tokyo Opera City Subscription Concert

Thu. Sep. 15, 2022, 19:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

The 974th Suntory Subscription Concert

Fri. Sep. 16, 2022, 19:00 at Suntory Hall

The 975th Orchard Hall Subscription Concert

Mon / Holiday Sep. 19, 2022, 15:00 at Bunkamura Orchard Hall

Andrea Battistoni, conductor

Kaoru Kondo, concertmaster

Liszt (orchestrated by Battistoni):

Après une lecture de Dante, from *Années de pèlerinage: Second Year, "Italie"* (ca. 18 min)

— intermission (ca. 15 min) —

Mahler:

Symphony No. 5 in C-sharp minor (ca. 70 min)

Part I

I. Trauermarsch: In gemessenem Schritt

II. Stürmisch bewegt. Mit grösster Vehemenz

Part II

III. Scherzo: Kräftig, nicht zu schnell

Part III

IV. Adagietto: Sehr langsam

V. Rondo-Finale: Allegro giocoso; frisch

15
Sep

16
Sep

19
Sep

Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra

Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan |
Japan Arts Council

In Association with **Bunkamura** (Sep. 19)



- Exiting during the performance will be tolerated. If you do not feel well, please exit or enter as you need. However, please mind the other listeners so that they will be minimally disturbed.
- If you enter just before the concert, we may escort you to a seat different from the one to which you were originally assigned.
- Please refrain from using your cellphone or other electronic devices during performance.
- In order to avoid crowding when exiting the hall, we ask that you exit the hall by staggered times in cooperation with guidance that staff will provide at the venue at the end of the concert.

Artist Profile



©Takafumi Ueno

Andrea Battistoni, conductor

Chief Conductor of
the Tokyo Philharmonic Orchestra

Born in Verona in 1987, Andrea Battistoni is a rising star with an international reputation as one of the most important conductors of his generation. He was appointed First Guest Conductor at the Teatro Carlo Felice in Genoa

in 2013, and Chief Conductor of the Tokyo Philharmonic Orchestra in 2016.

In Tokyo he has proved to be a sensation with his charisma and sensitive musicality, conducting Tokyo Phil in operas such as Nabucco, Rigoletto, Madama Butterfly (Nikikai), and Aida (co-produced grand opera), as well as numerous symphonic works including Roman Trilogy, Pictures at an Exhibition, and Rite of Spring. The concert-style operas he has led - Turandot (2015), Iris (2016), and Mefistofele (2018) have secured his reputation as a leading light with critics and audiences alike. He has been regularly releasing CDs with the Tokyo Phil through Nippon Columbia.

Other noteworthy engagements include: Teatro alla Scala, La Fenice in Venice, Deutsche Oper Berlin, Arena di Verona, Bayerische Staatsoper in Munich, Mariinsky Theater, and world-renowned orchestras such as the Filarmonica della Scala, Accademia di Santa Cecilia, and Israel Philharmonic.

His book, *Non è musica per vecchi* was published by Rizzoli in 2012, and by Ongaku-No-Tomo-Sha in Japan in 2017.

In 2021, Andrea Battistoni, performing with Tokyo Phil, won the OPUS KLASSIK Prize 2021 in the 20th/21st Century symphonic category, one of the most prestigious classical awards in Europe, for their international disc, "Dvorak: Symphony No. 9, 'From the New World' & Works of Akira Ifukube."

Website <http://www.andreabattistoni.it/>

Facebook <https://www.facebook.com/Andrea-Battistoni-159320417463885/>

15
Sep16
Sep19
Sep

Program Notes

Text by Robert Markow

Liszt:

Après une lecture de Dante, from *Années de pèlerinage*:
Second Year, "Italie"

In his time, Franz Liszt probably traveled as much as any jet-set conductor or soloist does today. His journeys across the length and breadth of Europe included “pilgrimages” (as he called them) to Switzerland and Italy, voyages of artistic and spiritual discovery that he later translated into musical expression in the form of three books of piano pieces called *Années de pèlerinage*. To Richard Freed, the three books of *Années* constitute “the most vast and fascinating series of works by Liszt to be collected under a single title. ... The respective installments follow Liszt’s ever-expanding stylistic range over a period of more than 40 years, from the age of 23 to 66, thus tracing the composer’s own pilgrimage from the state of virtuoso to that of prophet.”

Book II is devoted to Liszt’s impressions and reminiscences of the art and literature of Italy, absorbed while traveling there with the Comtesse Marie d’Agoult between 1837 and 1839. The seven component pieces were written between 1837 and 1849, but not published until 1858. The final number is “Après une lecture du Dante”: Fantasia quasi sonata, or the “Dante Sonata” for short. The title translates as “after a reading from Dante” (not “after a lecture by Dante”!), and was adopted from a poem by Victor Hugo. It is generally considered to be the most substantial, ambitious, impassioned and harmonically far-reaching work of the entire *Années*. (Some years later, Liszt was also to produce a *Dante* Symphony.)

The work is laid out in a single, extended movement in several connected sections, numerous changes of tempo, and three main motivic/thematic ideas. The first of these is heard in the opening measures, a descending series of stentorian octaves spaced a tritone apart (this being the “devil’s interval”). The second is a restless, ominous motif that slithers chromatically up and down the scale of D minor, a key composers

15
Sep

16
Sep

19
Sep

often associated with the underworld (parts of Mozart's *Don Giovanni*, Schubert's "Death and the Maiden" Quartet, Liszt's own *Totentanz* and *Dante* Symphony, etc.). This is heard at first quietly, and later in various manifestations and volume levels. The third is a broadly lyrical theme in F-sharp major (a favorite key of the Romantics, especially to depict beatific scenes) set at first to a rippling accompaniment, and later to a backdrop of thundering octaves. The work ends with a last glimpse of Paradise.

FRANZ LISZT: Born in Raiding, Hungary (today in Austria), October 22, 1811; died in Bayreuth, Germany, July 31, 1886

Work composed (Liszt work): 1837 / 1849 **Work composed (Battistoni work):** 2021 **World premiere (Liszt work):** 1839 in Wien with the composer as soloist **World premiere (Battistoni work):** September 15, 2022 in Tokyo

Instrumentation: piccolo, 2 flutes, 2 oboes, English horn, 2 clarinets, bass clarinet, 2 bassoons, contrabassoon, 4 horns, 3 trumpets, 3 trombones, tuba, timpani, percussion (bass drum, suspended cymbal, cymbals, tam-tam, tubular bells, glockenspiel), 2 harps, strings

Andrea Battistoni on *Après une lecture de Dante*

Text by Andrea Battistoni / Translated by Flavio Parisi

Connoisseurs of Liszt know very well the Hungarian-born composer's quest for unusual sonorities, unprecedented nuances and imitation of orchestral textures in his keyboard works.

Fascinated by the so-called "Dante Sonata", I decided to depict these qualities in an orchestration that was in vogue until the 1950s. My aim, therefore, is not an orchestration in the style of Liszt and his contemporaries, but rather a free transcription for large orchestra in the manner of Ravel, Respighi and Stokowski.

Every transcription is in itself both a homage and a betrayal. In my orchestration, the accentuation and expressive indications by Liszt are all retained, in order to respect the composer's original content and to provide the most complete image of this adaptation. However, the metronomic indications as well as all the timbral combinations are my own, as I considered them more suitable for the symphonic performance of this work. In today's musical world, so focused on philology, written sources, and loyalty to the

text, I hope this work will nevertheless find a place as a heartfelt homage to a great composer of the past without upsetting purists too much. I am comforted by the fact that Liszt himself made numerous transcriptions and paraphrases of music by other composers, music in which he reworked the enchantment of the original works by weaving together personal interpretation with acknowledged tribute. What fascinates me the most about this Dante Sonata are its atmosphere, both mystical and heart-breaking, and its combination of contemplation and virtuosity that characterizes Liszt's music, which can be angelic and demonic at the same time.

It is not clear from which canto of the *Divine Comedy* Liszt drew inspiration while composing these pages, but it is not difficult to imagine the infernal flames among the waves of terrifying sounds, or the tale of the unfortunate lovers Paolo and Francesca in the *cantabile* passage midway through. To the ominous opening motto it is almost possible to sing "Abandon all Hope, ye who enter here," as inscribed on the gate of Hell. From here, a dark descent into the abysses of the orchestra, or Dante's circles, awaits the listener in sinuous chromatic spirals similar to serpents' coils.

As already mentioned, one of the features of Liszt's music is how he combines the sacred and profane. It is not difficult to sense, on the one hand, a heavenly breeze in the tremolos accompanying an angelic chorale, and on the other a sulphuric stench in the can-can-inspired dances that portray the descent into Hell. In the final pages my orchestration, I have highlighted with triumphant bells the transition from Dante's journey into the abysses of evil to the highest reaches of heaven and hope for a better world.

15
Sep16
Sep19
Sep

Mahler: Symphony No. 5 in C-sharp minor

Concertgoers familiar with Mahler's Fourth Symphony may recall that the first movement contains a trumpet call remarkably similar to that which opens the Fifth. This fact may be regarded symbolically as Mahler's conscious effort to move ahead in a new direction in the Fifth, yet at the same time to show that the new must build on the foundations of the old. Mahler's new-found and deep acquaintance with Bach probably had much to do with his new compositional style, a style that conductor Bruno

Walter called “intensified polyphony.” The orchestral fabric becomes more complicated – more instruments playing more different lines at the same time. His style becomes generally less lyrical, more angular and hard-edged. Hymns of love, childlike faith and quasi-religious messages tend to be replaced by moods of tragic irony, bitterness and cynicism. Mahler conducted the first performance with the Gürzenich Orchestra of Cologne on October 18, 1904.

The Fifth Symphony is in five movements, further grouped into three large units, with a huge scherzo serving as the fulcrum to a pair of movements on either side. The work opens with a funeral march, a type of music found in every one of Mahler’s ten symphonies except the Fourth and Eighth. To the ponderous, thickly-scored tread of the march is added a gentle lament in the strings. Suddenly the music erupts in wild, impassioned strains. The ever-changing, kaleidoscopic aspect of Mahler’s orchestration is heard in its fullest expression. Eventually the funeral march music reasserts itself, and after a nightmarish climax, the movement disintegrates in ghostly echoes of the trumpet call.

The second movement shares many qualities with the first, both emotionally and thematically. Easily identifiable variants and transformations of the first movement’s melodic material can be found. The turbulent, stormy mood continues and is even intensified. Paroxysms of violent rage race uncontrolled in some of the most feverish music ever written. Quiet interludes recall the funeral lament of the first movement. Towards the end of the movement gleams a ray of hope – the brass proclaim a fragment of a victory chorale, an anticipatory gesture that will find its fulfillment in the symphony’s closing pages.

The despair and anguish of Part I are abruptly dismissed by the life-affirming Scherzo (Part II) – the longest and most complex scherzo Mahler ever wrote. The tremendous energy that infuses the scherzo segments alternates with nostalgic and wistful interludes in waltz or *Ländler* rhythm. Though the movement is not meant to be programmatic, one is tempted to imagine Mahler’s Austrian landscapes, the peasant dances and the bustle

and joy of life. The role of the principal horn becomes nearly that of a concerto soloist.

Part III consists of the *Adagietto* and the Finale. In the *Adagietto*, scored only for strings and harp, we return to a romantic dream world familiar from Mahler's earlier works, a world of quiet contemplation, benign simplicity, inner peace and escape from harsh reality. The *Adagietto* is surely the most famous single movement in all Mahler, a phenomenon dating back to its prominent use in the popular film *Death in Venice* (1971).

A single note from the horn dispels the romantic mood, and the merry Rondo-Finale is on its way. The interconnectedness of the final two movements is seen not only in the first four notes of the rondo theme (an exact inversion of the first four notes of the *Adagietto* theme), but in the use of the *Adagietto* theme as the subject of a fugal episode. Some of Mahler's most vibrant, exuberant, wildly extroverted music is found in this Finale. Near the end the brass chorale is recalled, heard previously in the second movement but now bursting forth in full glory and triumph. The metamorphosis from grief and death to joy and life is complete.

GUSTAV MAHLER: Born in Kalischt, Bohemia, July 7, 1860; died in Vienna, May 18, 1911 **Work composed:** 1901-02 **World premiere:** October 18, 1904 in Cologne, by the Gürzenich Orchestra of Cologne conducted by the composer

Instrumentation: 4 flutes (3rd and 4th doubling on piccolos), 3 oboes (3rd doubling English horn), 3 clarinets (2nd doubling on Es(E♭) clarinet, 3rd doubling on bass clarinet), 3 bassoons (3rd doubling on contrabassoon), 6 horns, 4 trumpets, 3 trombones, tuba, timpani, percussion (snare drums, bass drum, bass drum with attached cymbals, triangle, cymbals, tam-tam, slapstick, glockenspiel), harp, strings

Formerly a horn player in the Montreal Symphony, **Robert Markow** now writes program notes for orchestras as well as for numerous other musical organizations in North America and Asia. He taught at Montreal's McGill University for many years, has led music tours to several countries, and writes for numerous leading classical music journals.

15
Sep16
Sep19
Sep

Infection Control at Tokyo Phil

In our concerts, we assign top priority to the safety and health of all those involved, including the audience, the performers, and the staff members. From rehearsal to performance, we have been taking measures on stage, backstage, in dressing rooms, and in audience lobbies in accordance with the guidelines for the prevention of the spread of new coronaviruses published by the government of Japan, the Tokyo Metropolitan Government, and other related organizations.



We request that our audience disinfect their hands before entering the venue and maintain social distance with each other in lining up.



The audience's temperature is checked with a thermography camera and so on.



In order to avoid crowding when entering and exiting the hall, we ask that you enter and exit the hall by staggered times. Thank you for your cooperation.

If the attendee who comes to the venue is different from the purchaser of the ticket, we request to fill out the attendee's contact information in the ticket stub. The contact information will be kept under lock and incinerated one month after the performance.

Photo by K. Miura / Takafumi Ueno



Face Masks
Required



Physical
Distancing



Sanitizing
Stations



Frequent Cleaning
and Disinfecting



Improved Indoor
Ventilation

Please wear a mask at all times in the hall.

Please refrain from talking in the lobby or in the auditorium.

Please keep ample distance between audience members in the lobby.

Please disinfect your hands frequently.

Our staff will disinfect and wipe down the venue.

Adequate ventilation is provided in the auditorium.

Please cooperate with staggered entry and exit.

東京フィルだより — 2022年シーズン今後の定期演奏会

10月の定期演奏会

第976回サントリー定期シリーズ

10月20日(木) 19:00 サントリーホール 大ホール

第150回東京オペラシティ定期シリーズ

10月21日(金) 19:00 東京オペラシティ コンサートホール

第977回オーチャード定期演奏会

10月23日(日) 15:00 Bunkamura オーチャードホール

指揮: **チョン・ミョンフン** (東京フィル名誉音楽監督)

ファルスタッフ(バリトン): セバスティアン・カターナ

フォード(バリトン): 須藤慎吾

アリーチェ(ソプラノ): 砂川涼子

フェントン(テノール): 小堀勇介

ナンネッタ(ソプラノ): 三宅理恵

カイウス(テノール): 清水徹太郎

クイックリー(メゾ・ソプラノ): 中島郁子

バルドルフォ(テノール): 大槻孝志

メグ(メゾ・ソプラノ): 向野由美子

ビストラ(バス): 加藤宏隆

合唱: 新国立劇場合唱団



チョン・ミョンフン

©上野隆文



セバスティアン・カターナ

ヴェルディ/歌劇『ファルスタッフ』(演奏会形式)

公演時間: 約2時間30分(休憩を含む)

原作: ウィリアム・シェイクスピア『ウィンザーの陽気な女房たち』

台本: アッリーゴ・ボーイト

【料金】1回券 SS¥15,000 S¥10,000 A¥8,500 B¥7,000 C¥5,500

*東京フィルフレンズ(年会費無料・随時入会受付中)入会で、定価の10%割引で購入いただけます(SS席を除く)。

お申込み・お問合せは
東京フィルチケット
サービスまで

03-5353-9522 (10時~18時/発売日を除く土日祝休)
<https://www.tpo.or.jp/> (24時間受付・座席選択可)

2022 Season Next Subscription Concerts

October

Thu. Oct 20, 19:00
at Suntory Hall

Fri. Oct 21, 19:00
at Tokyo Opera City Concert Hall

Sun. Oct 23, 15:00
at Bunkamura Orchard Hall

conductor: **Myung-Whun Chung**,
Honorary Music Director

Verdi:

Opera "**Falstaff**" in concert style
with Japanese supertitles

Libretto by Arrigo Boito
from William Shakespeare's
"The Merry Wives of Windsor"

Single tickets available

Inquiries about tickets > <https://www.tpo.or.jp/en/>

2年ぶりのオペラ演奏会形式! マエストロ チョン・ミョンフン指揮

ヴェルディ／歌劇『ファルスタッフ』の物語

舞台は英国ヘンリー四世の御代、ウィンザーのとある街。

主人公の老騎士サー・ジョン・ファルスタッフは

若い時から強欲で女が好きで大酒飲み、

彼の行く場所には騒動が絶えません。

ある日、ファルスタッフは酒を飲みながら考えます。

「二人のご婦人に同じ内容のラブレターを送って、

恋の冒険を楽しんだ末にその財産を頂戴してやろう」…

ファルスタッフのあざれた野心を手伝う羽目になった従者たちと、

偽の恋文を受け取った二人の婦人とその友人たちが巻き起こすひと騒動。

最後には皆大笑いで大団円を迎えます。

皆からこてんぱんに貶されても自信たっぷりのファルスタッフと、

全員で「最後に笑う者が本当に笑う」と高らかに歌い上げるラストシーンは

私たちに豊かな人生とは何かを教えてくれるようです。





東京フィル名誉音楽監督
マエストロ チョン・ミョンフンが語る
『ファルスタッフ』

写真 ©上野隆文

「この作品は喜劇です。今回は演奏会形式の上演ですが、喜劇としてお客様に笑っていただける要素を随所に盛り込んで舞台を作りたいと考えています。

たとえば…“太鼓腹”と描写される騎士ファルスタッフの体格や衣裳、物語で重要な小道具となる2通のラブレターやファルスタッフが隠れる洗濯籠、酒びん、鹿のツノなど……。それぞれの人物についての視覚的なイメージも重要です。多くの登場人物が現れるこの作品で、私も舞台の上で何かするかもしれません。『ファルスタッフ』は他のヴェルディ作品と比べれば有名なアリアはほとんどありませんが、それ故に難しく、喜劇と言っても侮ってはならない、とても高尚な作品なのです」



ヴェルディの最高傑作にして最後の喜劇『ファルスタッフ』に、今回初めて取り組むというマエストロ チョン・ミョンフン。今年の11月にはイタリアで最も歴史ある歌劇場のひとつ、ヴェニス・フェニーチェ劇場のシーズンオープニングで演出つきの同演目を指揮する予定です(エイドリアン・ノーブル演出)。10月の公演では、これに先駆けて、世界でいち早く東京フィルとともに『ファルスタッフ』の音楽をお届けすることになります。



10月の定期演奏会は、名誉音楽監督チョン・ミョンフンによるオペラ演奏会形式上演、ヴェルディの歌劇『ファルスタッフ』。“イタリア・オペラの巨人”作曲家ヴェルディの最後にして最高の傑作喜劇である本作を指揮するのは、マエストロにとって今回の東京フィル定期が初めてとなるそう。これまでミラノやウィーン、ヴェネツィア等世界の名だたる歌劇場で数々のオペラを指揮し、ヴェルディ作品にも精通するマエストロが今、初めて向き合うヴェルディ『ファルスタッフ』。高まる期待とともにその聴きどころをご紹介します。

文＝香原斗志(音楽評論家)

東京フィル名誉音楽監督チョン・ミョンフンがいよいよ、ジュゼッペ・ヴェルディの『ファルスタッフ』を指揮する。これまで振らなかったのは、機が熟すのを待つ必要があったからだろう。

ヴェルディは1871年に『アイーダ』を世に問うと、16年もオペラの新作を発表しなかった。その後、73歳で初演した『オテッロ』(1887年初演)と、初演時に79歳になっていた『ファルスタッフ』(1893年初演)という、シェイクスピアの戯曲をもとにした最後の2作は、『アイーダ』までのオペラとは異なる手法と様式で書かれた。そこに円熟の技法が加わって、ともにイタリア・オペラのひとつの頂点と呼ぶべき傑作に仕上がっている。

音楽出版のジュリオ・リコルディの尽力もあり、29歳年下の作曲家で詩人、アッリーゴ・ボーイトのすぐれた詩を得たヴェルディが、久方ぶりに本気になったのだ。2作に共通するのは、アリア、重唱、合唱など個々の曲に番号をふる伝統的なスタイルを放棄し、ワーグナーの楽劇などと同様に、ひとつの幕の間は音楽が切れ目なく流れていくこと。結果として、それまで以上に音楽が言葉と密着し、ド

ラマとしての密度が非常に高くなった。

マエストロ チョンは、この2作のうち『オテッロ』は、1990年代から幾度となく指揮してきた。1993年に音楽監督を務めていたパリのオペラ・バステューと録音したCDは名盤として名高く、2013年にはヴェネツィアのフェニーチェ劇場と来日して『オテッロ』を指揮。これも名演だった。

一方、『ファルスタッフ』には、これまで一度も手を出さなかったのである。

自身の円熟を待っていた

新しい様式で書かれているとはいえ、『オテッロ』はヴェルディが得意としてきた悲劇の集大成であり、力強いオーケストラと巨大な声を駆使して、感情の鮮やかな変化と劇的な対峙が描かれていく。パワーアップはしているが、ドラマのメリハリは従来のヴェルディらしさが踏襲されている。



G.ヴェルディ
(1813-1901)

しかし、『ファルスタッフ』はちがう。2作目の『一日だけの王様』以降、半世紀以上も手がけなかった喜劇なのである。そして、音楽が劇中の言葉に、それまでの作品を大きく超えるレベルで細やかに応えている。

悲劇であれば、言葉がふくむ感情を音楽として表出させる際に、明確なイメージを持ちやすい。だが、『ファルスタッフ』はおとなの喜劇だから、下手にメリハリをつけるとドラマが死んでしまう。繰り出される洒落な言葉の数々を千変万化する音楽で色づけ、細やかなニュアンスを加えることで、はじめて味わいが得られる。

しかも『ファルスタッフ』は、ヴェルディがはじめて自分のために楽しんで作曲したオペラである。主人公のサー・ジョン・ファルスタッフは飲んだくれで好色の太鼓腹。ヴェルディはこの老騎士を、自らの戯画としても描いている。

要するに、ヴェルディが書いたオペラのなかで、ある意味、もっとも味わい深い作品だといえるが、十分な「味わい」が得られるためには、指揮する側の円熟が欠かせない。そこでチョン・ミョンフンは、自らの円熟を焦らずに待っていたのだろう。

上質の笑いを引き出す手腕

こうしてマエストロ チョンは今年11月、『ラ・トラヴィアータ(椿姫)』をはじめヴェルディの複数のオペラを初演してきたイタリア屈指の名門歌劇場、ヴェネツィアのフェニーチェ劇場のシーズン開幕公演で『ファルスタッフ』を5公演指揮する。マエストロはこの歌劇場と長年、深い信頼関係を築いているが、それに先立って、同様に深くかわり、日ごろから特別な思いを吐露している東京フィルハーモニー交響楽団と、10月に3回にわたって『ファルスタッフ』に挑む。日ごろ



エドゥアルト・グリュッツナーによるファルスタッフの肖像

東京で音楽を聴いている人間にとって、マエストロが自身の初演の

場所に東京フィルを選んだことほど、うれしいこともない。

東京フィルの公演は「演奏会形式」とされているが、現実には少しちがうようだ。このオペラを、機が熟すまで長く温めていただけたことはある。マエストロは今年5月に来日した際、東京フィルと『ファルスタッフ』に関する打ち合わせを行ったが、舞台上で人がどう動くべきか、小道具や衣装はどうあるべきか、すでに詳細なイメージを持っていた。そしてスコアを見ながら、長年寄り添っているマネージャーも驚くほど熱心に講義をしたという。

『ファルスタッフ』はヴェルディのオペラのなかで、もっとも洗練されていると思う。それは、この作曲家の半世紀を超える作曲活動の集大成であり、ヴェルディという成長型の作曲家が最後に到達した境地であればこそ、である。

近年、円熟を増しているマエストロ チョンは、自身のいまの円熟は、ヴェルディが『ファルスタッフ』において到達した境地に寄り添えるものだ、という確信を得たにちがいない。

そうすると、おのずと熱の入りがちがってくる。だからこそ、作品について視覚的にもイメージを深めているのである。

このオペラならではの質的な笑いと、終演後のなんともいえない心地よさ。それを得るためには、作品の深みから味わいを掬いだす円熟の手腕が欠かせない。いまのマエストロ チョンにはまちがいないその手腕がある。



今年5月に行われたマエストロによる『ファルスタッフ』講義

かはらとし／イタリア・オペラなど声楽作品を中心にクラシック音楽全般について音楽専門誌や公演プログラム、研究紀要、CDのライナーノーツなどに原稿を執筆。著書に『イタリアを旅する会話』（三修社）、共著に『イタリア文化事典』（丸善出版）。新刊に『イタリア・オペラを疑え!』（アルテスパブリッシング）。毎日新聞クラシックナビに「イタリア・オペラ名歌手カタログ」を連載中。歴史評論家でもあり、新刊に『カラー版 東京で見つける江戸』（平凡社新書）がある。

公演情報詳細は19ページをご参照ください。

特設サイトはこちら▶



<https://www.tpo.or.jp/information/detail-20221020.php>

News & Information

【特別演奏会】『第九』特別演奏会2022 発売中!

2022年を締めくくる『第九』特別演奏会の概要が決定いたしました。名匠・尾高忠明とともに、実力派のソリスト歌手陣、新国立劇場合唱団とともにベートーヴェンの至高の名曲をお届けいたします。

日時・会場 12月22日(木)19:00開演 東京オペラシティ コンサートホール
12月25日(日)15:00開演 Bunkamura オーチャードホール

出演 指揮：尾高忠明(東京フィル桂冠指揮者)
ソプラノ：迫田美帆 アルト：中島郁子
テノール：清水徹太郎 バリトン：上江隼人
合唱：新国立劇場合唱団(合唱指揮：河原哲也)

曲目 ベートーヴェン／バレエ音楽『プロメテウスの創造物』序曲 作品43
ベートーヴェン／交響曲第9番 ニ短調『合唱付』作品125

料金(税込・全席指定) S席¥11,000 A席¥8,800 B席¥6,600 C席¥4,400

※C席は12/25公演のみの販売となります。※東京フィルフレンズ会員(年会費無料・随時受付中)様はお電話のお申込みで10%OFFでご購入いただけます。※やむを得ない事情により、出演者・曲目などが変更になる場合がございます。※公演中止の場合を除き、お求めいただいたチケットの払戻・変更等はいたしません。

発売日 最優先(賛助会員、定期会員様)／優先(東京フィルフレンズ会員)：発売中
WEB優先(どなたさまも定価の10%OFF)：発売中 9/19(月・祝)23:59まで
一般発売：9/20(火)10:00～

問合せ 東京フィルチケットサービス 03-5353-9522
(10:00～18:00・土日祝休)
東京フィルWEBチケットサービス <https://www.tpo.or.jp/>
(24時間受付・座席選択可)



2020年の尾高忠明指揮『第九』特別演奏会より ©上野隆文

Photo Reports 2022年7・8月の演奏会より

7月定期演奏会には東京フィル定期初登場・同時に日本デビューを迎えた俊英・出口大地が登場。オール・ハチャトゥリアン・プログラムで、作曲家の母国アルメニアと日本の外交関係樹立30年という節目を祝いました。7月・8月は「午後のコンサート」や「ハートフルコンサート」など親しまれるコンサートが続き、多くのお客様にひとときの涼とともに美しい調べをお届けしました。

写真＝上野隆文(7/10)・三浦興一(7/12、8/15)

7月定期演奏会(7/7、10、12)

指揮：出口大地 ヴァイオリン：木嶋真優* コンサートマスター：三浦章宏

ハチャトゥリアン／バレエ音楽『ガイーン』より

ハチャトゥリアン／ヴァイオリン協奏曲*

【ソリスト・アンコール】イグデスマン(木嶋真優編)／ファンク・ザ・ストリング(7/10)、コミタス(木嶋真優編)／「クランク」～イグデスマン・ファンタジー(7/12)

ハチャトゥリアン／交響曲第2番『鐘』



オーケストラ・キャラバン飛騨市文化交流センター開館15周年記念(7/18)

指揮：円光寺雅彦 チェロ：山崎伸子

第93回休日の午後のコンサート(7/24)、

第14回休日の午後のコンサート(7/27)

〈夏を踊る〉

指揮とお話：三ツ橋敬子 バンドネオン：小松亮太*

コンサートマスター：近藤薫

シャブリエ／狂詩曲『スペイン』

ガーデ／ジェラシー*

ピアソラ／アディオス・ノニーノ*、リベルタンゴ*

小松亮太／バンドネオンとオーケストラのための習作【世界初演】*

【ソリスト・アンコール】ピアソラ／オブリヴィオン

ビゼー／歌劇『カルメン』第1組曲

ファリャ／バレエ音楽『三角帽子』第2組曲より「粉屋の踊り」～終曲

【オーケストラ・アンコール】ファリャ／バレエ音楽『恋は魔術師』より「火祭りの踊り」



第27回平日の午後のコンサート(8/5)
 〈千夜一夜物語〉
 フェスタサマーミュージックKAWASAKI2022(8/7)

指揮とお話：ダン・エッティンガー(桂冠指揮者)

ヴァイオリン：服部百音*

MC：綿谷エリナ コンサートマスター：三浦章宏

ワーグナー／楽劇『ニュルンベルクのマイスタージン
 ガー』より第1幕への前奏曲

ワックスマン／カルメン・ファンタジー(8/5)*

メンデルスゾーン／ヴァイオリン協奏曲(8/7)*

【ソリスト・アンコール】パガニーニ／モト・ペルベトゥオ
 (無窮動/常動曲)

リムスキー＝コルサコフ／交響組曲『シェエラザード』

【オーケストラ・アンコール】ロッシーニ／歌劇『ウィリア
 ム・テル』序曲より「スイス軍の行進」



桂冠指揮者ダン・エッティンガーが3年ぶりの登場



ソリストは気鋭のヴァイオリニスト服部百音さん。技巧と歌を存分に響かせ、トークでも客席を沸かせました

ハートフルコンサート2022(8/15)
 東京芸術劇場 コンサートホール

お話・語り：黒柳徹子

ヴァイオリン：前橋汀子* 指揮：角田鋼亮

コンサートマスター：近藤薫

ドヴォルザーク／スラヴ舞曲第8番

ベートーヴェン／ヴァイオリンと管弦楽のた
 めのロマンス第2番*

サラサーテ／ツィゴイネルワイゼン*

小森昭宏作曲・黒柳徹子の語りとオーケス
 トラによる／音楽物語『窓ぎわのトットちゃん』

【語り・原作：黒柳徹子 構成：黒柳徹子・飯沢 匡】

【アンコール】ジョン・レノン(前田憲男編)

／イマジジン



東京フィル副理事長でもあるユニセフ親善大使・女優の黒柳徹子。「最初は、第二次世界大戦で傷ついた人たちに元気を届けたいと思い始めたコンサートでした」と黒柳。若い人たちにも戦争の悲惨さを知ってほしいと話しました



演奏活動60周年を迎えた前橋汀子さんが美しい音色で名曲を奏でました



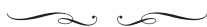
音楽物語『窓ぎわのトットちゃん』では東京フィルメンバーも仮装して活躍(「チンドン屋さん」)

シューベルトを子守歌に、
眠りに誘われてユニオンツール株式会社
代表取締役会長

片山 貴雄



東京フィルのゆかりの方々に、クラシック音楽に魅了されたきっかけや音楽生活について綴っていただく本連載。第12回は、法人賛助会のユニオンツール株式会社 代表取締役会長の片山貴雄様。レコードを通じて音楽に親しんだ幼少期、オーケストラに目覚めた少年期、そしてご家族で音楽家をご支援されるに至る美しい日々を、東京フィルへの温かいお言葉とともに綴ってくださいました。



私は小学校入学前の幼い頃は病弱で、夕食が終わり家族の団欒時間になる頃には、床に無理やりつかされるような幼少期を送っていました。暗く電灯が消された寝室で家族のお喋りを聞きながら、父がかかるレコードの音の子守歌代わりにしていました。レコードは時代によって変わりますが、特に印象に残っているのがシューベルトの『冬の旅』です。フィッシャー=ディースカウのバリトンと家族の団欒の声を聞きながら眠りに落ちていきました。余談ながら、叱られた夜は『冬の旅』が『魔王』に変わりました。あらすじはあらかじめ聞いていたので、その怖さから布団を頭から被って眠りにつきました。

私がオーケストラに目覚めたのは小学生の時です。小学校の音楽鑑賞で地区の小学生が区民ホールに招かれてオーケストラの実演を聴いた時です。曲目はビゼーの『アルルの女』でした。メヌエットの美しいフルートの音色に心を奪われました。その感動を家に帰って家族に話すと、翌日にはレコードが

買ってあったのを今でも覚えております。東京フィルでは各地の小中学校で演奏をして頂いておりますが、その効果は何十年後に必ず結果をもたらすことを私は確信しており、このような活動を今後も応援していきたいと思っております。

また、年末恒例の『第九』演奏会は我が家では儀式になっておりました。幼い頃は最初の『歓喜の歌』に聴き入り、その後は眠気に負け、最後の合唱で目を覚ますことの連続でしたが、年齢とともに第2、第3楽章に惹かれていきました。

そして歳月は流れ、父の80歳の誕生日です。お祝いに我が家に父を招待し、当時新進気鋭のピアニストであられた仲道郁代さんに自宅でピアノ演奏をしていただきました。コンサートホールのような広い空間ではなく、狭い居間で聴くグランドピアノは、今にも動き出すのではないかと思うほど迫力のある演奏でした。小さな音符の一つ一つまで聴き漏らすまいと思った私は、その後一日動けなくなる程の衝撃を受けました。仲道郁代さんとはそれ以来後援会長をさせて頂くほどの関係になっております。



私の職業は音楽とは全く関係のないものです。父も、家族もそうでした。しかし、音楽に人生の節目で影響を受け、私の感受性を高めてくれました。私たちの心を豊かにしてくれる音楽に感謝し、東京フィルハーモニー交響楽団の益々の発展をお祈りしております。

片山貴雄(かたやま・たかお)

1953年東京生まれ。1976年東京理科大学工学部学部卒業後、1979(昭和54)年ユニオンツール株式会社入社。1996(平成8)年同社代表取締役社長、2014(平成26)年同社代表取締役会長(現任)。

ユニオンツール株式会社様は、産業用切削工具の製造・販売をする企業です。

「優れた製品を供給し社会に貢献する」という経営理念のもと、電子機器の新たな発展に寄与することで、人々の快適で安全な生活を追及し、「人と技術と地球を結ぶ」企業として社会に貢献されています。URL: <https://uniontool.co.jp>

長月に入り、爽やかな秋風を感じる頃となりました。

皆様におかれましてはお健やかに過ごしのことと存じます。

今月は、首席指揮者アンドレア・バットイストーニが

自身の管弦楽編曲とともに不朽の名曲をお届けいたします。

マエストロと当団が紡ぎ出す音色をぜひお楽しみください。

引き続きご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。



東京フィルハーモニー交響楽団 理事長 三木谷 浩史

賛助会

東京フィルハーモニー交響楽団の活動は、皆様のご寄附により支えていただいております。
ここに法人ならびに個人賛助会員（パートナー会員）の皆様のご芳名を掲げ、
改めて御礼申し上げます。

オフィシャル・サプライヤー（敬称略）

ソニーグループ株式会社	代表執行役 会長 兼 社長 CEO	吉田 憲一郎
楽天グループ株式会社	代表取締役会長兼社長	三木谷 浩史
株式会社マルハン	代表取締役 会長	韓 昌祐
株式会社ロッテ	代表取締役社長執行役員	牛腸 栄一
株式会社ゆうちょ銀行	取締役兼代表執行役社長	池田 憲人

法人会員

賛助会員（五十音順・敬称略）

(株)IIIH
代表取締役社長 井手 博

(株)アイエムエス
取締役会長 前野 武史

(医)相澤内科医院
理事長 相澤 研一

アイ・システム(株)
代表取締役会長 兼 社長 松崎 務

(株)アシックス
取締役会長 尾山 基

(株)インターテキスト
代表取締役 海野 裕

ANAホールディングス(株)
代表取締役社長 芝田 浩二

(株)NHKエンタープライズ
代表取締役社長 松本 浩司

大塚化学(株)
特別相談役 大塚 雄二郎

(株)オーディオテクニカ
代表取締役社長 松下 和雄

(公財)オリックス宮内財団
代表理事 宮内 義彦

カシオ計算機(株)
代表取締役 社長 CEO 樫尾 和宏

キヤノン(株)
代表取締役会長兼社長 CEO 御手洗 富士夫

(株)グリーンハウス
代表取締役社長 田沼 千秋

コスモエネルギーホールディングス(株)
代表取締役社長 社長執行役員 桐山 浩

サントリーホールディングス(株)
代表取締役社長 新浪 剛史

信金中央金庫
理事長 柴田 弘之

新菱冷熱工業(株)
代表取締役社長 加賀美 猛

(株)J.Y.PLANNING
代表取締役 遅澤 准

(株)滋慶
代表取締役社長 田仲 豊徳

(株)ジーヴァエナジー
代表取締役社長 金田 直己

菅波楽器(株)
代表取締役社長 菅波 康郎

相互物産(株)
代表取締役会長 小澤 勉

ソニーグループ(株)
代表執行役 会長 兼 社長 CEO 吉田 憲一郎

ソニー生命保険(株)
代表取締役社長 萩本 友男

(株)ソニー・ミュージックエンタテインメント
代表取締役社長CEO 村松 俊亮

(株)大丸松坂屋百貨店
代表取締役社長 澤田 太郎

都築学園グループ
総長 都築 仁子

東急(株)
取締役社長 高橋 和夫

東京オペラシティビル(株)
代表取締役社長 長島 誠

東レ(株)
代表取締役社長 日覺 昭廣

トップバン・フォームズ(株)
代表取締役社長 添田 秀樹

トヨタ自動車(株)
代表取締役社長 豊田 章男

DOWAホールディングス(株)
代表取締役社長 関口 明

(株)ニチケアパレス
代表取締役社長 秋山 幸男

(株)ニフコ
代表取締役会長 山本 利行

日本ライフライン(株)
代表取締役社長 鈴木 啓介

(株)パラダイスインターナショナル
代表取締役 新井 秀之

富士電機(株)
代表取締役会長 CEO 北澤 通宏

(株)不二家
代表取締役社長 河村 宣行

(株)三井住友銀行
頭取CEO 高島 誠

三菱地所(株)
執行役社長 吉田 淳一

三菱倉庫(株)
相談役 宮崎 毅

(株)三菱UFJ銀行
特別顧問 小山田 隆

ミライラボバイオサイエンス(株)
代表取締役 田中 めぐみ

(株)明治
代表取締役社長 松田 克也

森ビル(株)
代表取締役社長 辻 慎吾

ヤマトホールディングス(株)
代表取締役社長 長尾 裕

(株)山野楽器
代表取締役社長 山野 政彦

ユニオンツール(株)
代表取締役会長 片山 貴雄

(医)ユベンシア
理事長 今西 宏明

楽天グループ(株)
代表取締役会長兼社長 三木谷 浩史

(株)リソー教育
取締役会長 岩佐 実次

後援会員

(株)アグレックス
代表取締役社長 畝森 達朗

(医)エレル たにぐちファミリークリニック
理事長 谷口 聡

欧文印刷(株)
代表取締役社長 和田 美佐雄

(有)オルテンシア
代表取締役 雨宮 睦美

(医)カリタス菊山医院
理事長 加藤 徹

(医)だて内科クリニック
理事長 伊達 太郎

(宗)東京大仏・乗蓮寺
代表役員 若林 隆壽

(一社)凸版印刷三幸会
代表理事 金子 真吾

(株)トレミール
代表取締役 茶谷 幸司

(株)日税ビジネスサービス
代表取締役会長兼社長 吉田 雅俊

富士通(株)
代表取締役社長 時田 隆仁

本田技研工業(株)
取締役 代表執行役社長 三部 敏宏

三菱電機(株)
執行役社長 漆間 啓

ご支援の御礼とお願い

コロナ禍において、皆様からたくさんの励ましのお言葉とともに、東京フィルに温かいご支援をいただいておりますこと、心より御礼申し上げます。

新型コロナウイルス感染症は今も社会に大きな影響を及ぼしています。東京フィルもまた、深刻な打撃を受けています。2020年2月下旬から数か月にわたり、出演する演奏会のすべてが中止・延期となりました。その後も感染状況により公演の中止や延期、チケットの販売停止を余儀なくされております。東京フィルの財源は演奏料収入がほとんどを占めるため、演奏会およびチケット収入の壊滅は団体存続の危機に直結いたします。指揮者と楽団員、スタッフはPCR検査や抗原検査を何度も受けて公演に臨んでおり、これらの検査に掛かる費用もまた楽団の財政を圧迫しています。

今後も、当団は、芸術がもたらす感動がどんな時代にも社会を豊かにするとの信念のもと、お客様ならびに関係者の安全と安心を最優先に、状況を注視しながら活動を続けてまいります。皆様のご寄附が大きな力となります。皆様におかれましては、改めて楽団を取り巻く状況についてご理解を賜りますとともに、いっそうのご支援・ご助力を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

弊団へのご寄附をいただけます際には、こちらの口座のいずれかにお振込みくださいましたら幸いです。個人として1万円以上、法人として30万円以上のご寄附をご検討いただける際は、賛助会（次ページ）も併せてご覧ください。

金融機関名	口座番号	口座名義
ゆうちょ銀行（郵便振替）	00120-2-30370	公益財団法人
三井住友銀行・ 東京公務部（096）	普通預金 3003239	東京フィルハーモニー 交響楽団

※ ご寄附の金額は自由に設定いただけます。

※ 振込手数料、通信費は恐れ入りますがご負担くださいますようお願い申し上げます。

※ 領収証書が必要な方は、お手数ですがお振込後に、別途配布しております「寄附申込書」に必要事項をご記入の上、下記へご送付ください。

寄附申込書はこちらからも取得いただけます。

https://www.tpo.or.jp/support/img/support_TPO.pdf



【ご支援のお問合せ／寄附申込書 送付先】

公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団・広報渉外部 寄附担当
〒163-1408 東京都新宿区西新宿3-20-2 東京オペラシティタワー8階
Fax 03-5353-9523 Eメール: partner@tpo.or.jp
Tel 03-5353-9521（土日祝日を除く10時～18時）

東京フィル 賛助会 会員募集中

2022年に東京フィルハーモニー交響楽団は創立111年を迎えました。

これまでの歩みは、東京フィルとその音楽を愛する皆様の日頃からの大きなご支援とご助力なしには実現しえないものでした。心より御礼申し上げます。

東京フィルは1月をシーズンのスタートに据え、年間を通じて皆様の暮らしに音楽をお届けしてまいりました。国際的に活躍する音楽家や将来を嘱望される若い演奏家を招いての定期演奏会や「午後のコンサート」シリーズ、「第九」「ニューイヤーコンサート」などの特別演奏会や提携都市公演、学校や公共施設での音楽活動を通じ、今後も社会に広くオーケストラの価値を認知いただけるよう活動を続けてまいります。この活動を通じて、日本の芸術文化の発展に寄与し、今後ますます多様化・複雑化するグローバル社会において不可欠な心の豊かさ・寛容さを育み、次世代へと続く文化交流の懸け橋となるよう、より一層努めてまいります。

ぜひとも皆様方からの継続的なご支援を賜りますよう、謹んでお願い申し上げます。

東京フィルハーモニー交響楽団

賛助会(法人／パートナー(個人))会員の種別

種別		年会費1口
オフィシャル・サプライヤー		詳細はお問い合わせください。
法人会員	賛助会員	50万円
	後援会員	30万円
	ワンハンドレッドクラブ	100万円
	フィルハーモニー	50万円
パートナー会員	シンフォニー	30万円
	コンチェルト	10万円
	ラプソディ	5万円
	インテルメッツォ	3万円
	プレリュード	1万円

※東京フィルハーモニー交響楽団は内閣府により「公益財団法人」に認定されており、ご寄附の金額に応じて税法上の優遇措置を受けることができます。その他特典、お申込みや資料請求など、詳しくは東京フィル広報渉外部担当へお問合せください。

寄附をご検討くださいます際には、主催公演会場「主催者カウンター」または東京フィル担当(partner@tpo.or.jp)までお尋ねください。資料をお送りいたします。ご入会後は、1年ごとに継続のご案内をお送りいたします。

【賛助会に関するお問合せ・お申込み】

東京フィルハーモニー交響楽団 広報渉外部 (担当: 星野^{かのまた}・鹿丈)

電話: 03-5353-9521 (平日10時～18時) Eメール: partner@tpo.or.jp

皆様のご寄附は東京フィルの様々な活動を支えています。

フランチャイズ・ホール、事業提携都市との連携

東京フィルは、フランチャイズ・ホールであるBunkamuraオーチャードホール等での定期演奏会の他、東京都文京区、千葉県千葉市、長野県軽井沢町、新潟県長岡市の各地域と事業提携を結び、定期演奏会、親子のためのコンサートや中高生などへの楽器ワークショップ等、地域の皆様との交流を通じ音楽の魅力をお届けしています。

文化庁「文化芸術による子供育成推進事業 巡回公演事業」

文化庁が主催する本事業は、日本全国の小中学校や特別支援学校を訪問し、一流の文化芸術団体による巡回公演を行っています。東京フィルは国内オーケストラでは唯一、文化庁から8年間の長期採択を受け(2014～2021年度)、東日本大震災地域を含む北海道・東北地区の小中学校115校、のべ46,279名の児童・生徒、地域の皆様と交流を行い、さらに2019年度からは、これに加え、関東・東海・中国地区の小中学校61校のべ20,389名の児童・生徒に音楽をお届けしました。



小学校体育館でのオーケストラ本公演

令和4年度からは、「文化芸術による子供育成推進事業」と事業名が変更となり、東京フィルは中国地区の担当として新たに長期採択(2022～2024年度)を受けました。今年度は5月から12月にかけて、小中学校14校を訪問し、ワークショップとオーケストラ公演を開催します。

留学生の演奏会ご招待… 留学生招待シート

東京フィルでは国際交流事業の一環として、海外からの留学生や研修員の方々を定期演奏会へご招待する「留学生招待シート」を設けており、皆様からご寄附いただいたチケットも有効に活用させていただきます。詳しくは東京フィルチケットサービス(03-5353-9522)までお問合せください。



定期演奏会に來場のJICA東京研修生の皆様とチョン・ミョンファン(2019年7月東京オペラシティ定期)

©上野隆文

“とどけ心に”特別招待シート

東京フィルでは2011年の東日本大震災をきっかけに、自然災害などやむを得ない事情により国や地域を問わず故郷から避難されているかたがたを当団の主催公演にご招待する取り組みを行っています。招待をご希望の方は、東京フィルチケットサービス(03-5353-9522)まで、支援団体として東京フィルの演奏会を活用したいという場合は、東京フィル事務局(03-5353-9521)広報渉外部担当までご相談ください。

ご来場いただけなくなった定期演奏会チケットのご寄附について

東京フィルでは、ご購入いただきながらご来場いただけなくなった定期演奏会のチケットをご寄附いただき「留学生招待シート」「とどけ心に”特別招待シート”」として活用させていただいております。お手元にご来場いただけない公演チケットがございましたら、ぜひ東京フィルへご寄附ください。大切にさせていただきます。

【お問合せ・お申込み】東京フィルチケットサービス

電話：03-5353-9522(10時～18時/土日祝休)

7月の演奏会のチケットのご寄附をいただきました。心より御礼申し上げます。

岡 利英、小澤 薫、城水 裕美子、田部井 幸雄、八馬 しげ子、H.I.

(他、匿名希望7名)

(五十音順・敬称略)

特別公演、公演協賛、広告のご案内

東京フィルハーモニー交響楽団は、様々な音楽活動を通して、企業様の大切な節目である周年記念事業や式典、福利厚生イベント等でご活用いただけるオンラインワンの特別企画を展開しております。

- 商品のプロモーションとして何か施策を考えたい
- 社内向けイベントで室内楽の演奏を企画したい
- 東京フィルの公演プログラムに広告を掲載したい
- 新製品、サンプルを会場で販売・配布したい

どうぞお気軽にご用命ください。



日中国交正常化45周年記念上海公演後のレセプションにて

【広告・協賛のお問合せ】東京フィルハーモニー交響楽団 広報渉外部
電話：03-5353-9521(平日10時～18時) Eメール：partner@tpo.or.jp

東京フィルハーモニー交響楽団 1911年創立 楽団員

Tokyo Philharmonic Orchestra Since 1911 / Musicians

名誉音楽監督
Honorary Music Director

チョン・ヨンフン
Myung-Whun Chung

首席指揮者
Chief Conductor

アンドレア・バッティストーニ
Andrea Battistoni

桂冠指揮者
Conductor Laureate

尾高 忠明
Tadaaki Otaka

大野 和土
Kazushi Ono

ダン・エッティンガー
Dan Ettinger

特別客演指揮者
Special Guest Conductor

ミハイル・プレトニョフ
Mikhail Pletnev

アソシエイト・コンダクター
Associate Conductor

チョン・ミン
Min Chung

永久名誉指揮者
Permanent Honorary Conductor

山田 一雄
Kazuo Yamada

永久楽友・名誉指揮者
Permanent Member and
Honorary Conductor

大賀 典雄
Norio Ohga

コンサートマスター
Concertmasters

近藤 薫
Kaoru Kondo

三浦 章宏
Akihiro Miura

依田 真宜
Masanobu Yoda

第1ヴァイオリン
First Violins

小池 彩織☆
Saori Koike

榊原 菜若☆
Namo Sakakibara

坪井 夏美☆
Natsumi Tsuboi

平塚 佳子☆
Yoshiko Hiratsuka

浅見 善之
Yoshiyuki Asami

浦田 絵里
Eri Urata

景澤 恵子
Keiko Kagesawa

加藤 光
Hikaru Kato

巖築 朋美
Tomomi Ganchiku

坂口 正明
Masaaki Sakaguchi

鈴木 左久
Saku Suzuki

高田 あきの
Akino Takada

田中 秀子
Hideko Tanaka

栃本 三津子
Mitsuko Tochimoto

中澤 美紀
Miki Nakazawa

中丸 洋子
Hiroko Nakamaru

廣澤 育美
Ikumi Hirotsawa

弘田 聡子
Satoko Hirota

藤瀬 実沙子
Misako Fujise

松田 朋子
Tomoko Matsuda

第2ヴァイオリン
Second Violins

戸上 真里◎
Mari Togami

藤村 政芳◎
Masayoshi Fujimura

水島 路◎
Michi Mizutori

宮川 正雪◎
Masayuki Miyakawa

小島 愛子☆
Aiko Kojima

高瀬 真由子☆
Mayuko Takase

石原 千草
Chigusa Ishihara

出原 麻智子
Machiko Idehara

太田 慶
Kei Ota

葛西 理恵
Rie Kasai

佐藤 実江子
Mieko Sato

二宮 祐子
Yuko Ninomiya

本堂 祐香
Yuuka Hondo

山代 裕子
Yuko Yamashiro

吉田 智子
Tomoko Yoshida

吉永 安希子
Akiko Yoshinaga

若井 須和子
Suwako Wakai

渡邊 みな子
Minako Watanabe

ヴァイオラ
Violas

須田 祥子◎
Sachiko Suda

須藤 三千代◎
Michio Suto

高平 純◎
Jun Takahira

加藤 大輔○
Daisuke Kato

伊藤 千絵
Chie Ito

岡保 文子
Ayako Okayasu

曾和 万里子
Mariko Sowa

高橋 映子
Eiko Takahashi

手塚 貴子
Takako Tezuka

中嶋 圭輔
Keisuke Nakajima

蛭海 たづ子
Tazuko Hirumi

古野 敦子
Atsuko Furuno

村上 直子
Naoko Murakami

森田 正治
Masaharu Morita

チェロ Cellos	コントラバス Contrabasses	オーボエ Oboes	ホルン Horns	トロンボーン Trombones	ハープ Harps
金木 博幸◎ Hiroyuki Kanaki	片岡 夢児◎ Yumeji Kataoka	荒川 文吉◎ Bunkichi Arakawa	齋藤 雄介◎ Yusuke Saito	五箇 正明◎ Masaaki Goka	梶 彩乃 Ayano Kaji
服部 誠◎ Makoto Hattori	黒木 岩寿◎ Iwahisa Kuroki	加瀬 孝宏◎ Takahiro Kase	高橋 臣宜◎ Takanori Takahashi	中西 和泉◎ Izumi Nakanishi	田島 緑 Midori Tajima
渡邊 辰紀◎ Tatsuki Watanabe	遠藤 柁一郎 Shuichi Endo	佐竹 正史◎ Masashi Satake	磯部 保彦 Yasuhiko Isobe	辻 姫子○ Himeko Tsuji	ライブラリアン Librarians
黒川 実咲☆ Misaki Kurokawa	小笠原 茅乃 Kayano Ogasawara	杉本 真木 Maki Sugimoto	大東 周 Shu Ohigashi	石川 浩 Hiroschi Ishikawa	武田 基樹 Motoki Takeda
高麗 正史☆ Masashi Korai	岡本 義輝 Yoshiteru Okamoto	若林 沙弥香 Sayaka Wakabayashi	木村 俊介 Shunsuke Kimura	岩倉 宗二郎 Sojiro Iwakura	
広田 勇樹☆ Yuki Hirota	小栗 亮太 Ryota Oguri		田場 英子 Eiko Taba	平田 慎 Shin Hirata	ステージマネージャー Stage Managers
石川 剛 Go Ishikawa	熊谷 麻弥 Maya Kumagai	クラリネット Clarinets	塚田 聡 Satoshi Tsukada	山内 正博 Masahiro Yamauchi	
大内 麻央 Mao Ouchi	菅原 政彦 Masahiko Sugawara	チョ・スンホ◎ Sungcho Cho	豊田 万紀 Maki Toyoda		稲岡 宏司 Hiroschi Inaoka
太田 徹 Tetsu Ota	田邊 朋美 Tomomi Tanabe	アレッサンドロ・ ベヴェラリ◎ Alessandro Beverari	山内 研自 Kenji Yamanouchi	チューバ Tubas	大田 淳志 Atsushi Ota
菊池 武英 Takehide Kikuchi	中村 元優 Motomasa Nakamura	万行 千秋◎ Chiaki Mangyo	山本 友宏 Tomohiro Yamamoto	大塚 哲也 Tetsuya Otsuka	古谷 寛 Hiroschi Furuya
佐々木 良伸 Yoshinobu Sasaki		黒尾 文恵 Fumie Kuroo		荻野 晋 Shin Ogino	
長谷川 陽子 Yoko Hasegawa	フルート Flutes	林 直樹 Naoki Hayashi	トランペット Trumpets		
渡邊 文月 Fuzuki Watanabe	神田 勇哉◎ Yuya Kanda		川田 修一◎ Shuichi Kawata	ティンパニ& パーカッション Timpani & Percussion	
	斉藤 和志◎ Kazushi Saito	ファゴット Bassoons	野田 亮◎ Ryo Noda	岡部 亮登◎ Ryoto Okabe	
	吉岡 アカリ◎ Akari Yoshioka	チェ・ヨンジン◎ Young-Jin Choe	古田 俊博◎ Toshihiro Furuta	塩田 拓郎◎ Takuro Shiota	
	さかはし 矢波 Yanami Sakahashi	廣幡 敦子◎ Atsuko Hirohata	杉山 眞彦 Masahiko Sugiyama	木村 達志 Tatsushi Kimura	
	下払 桐子 Kiriko Shimobara	井村 裕美 Hiromi Imura	前田 寛人 Hirohito Maeda	鷹羽 香緒里 Kaori Takaba	
		桔川 由美 Yumi Kikkawa		縄田 喜久子 Kikuko Nawata	
		森 純一 Junichi Mori		船迫 優子 Yuko Funasako	
				古谷 はるみ Harumi Furuya	

◎首席奏者
Principal○副首席奏者
Assistant Principal☆ファオアシピラー
Vorspieler

東京フィルハーモニー交響楽団

1911年創立。日本で最も長い歴史をもつオーケストラ。メンバー約160名、シンフォニーオーケストラと劇場オーケストラの両機能を併せもつ。名誉音楽監督にチョン・ミョンフン、首席指揮者アンドレア・バティストニ、特別客演指揮者にミハイル・プレトニョフを擁する。Bunkamuraオーチャードホール、東京オペラシティ コンサートホール、サントリーホールでの定期演奏会や「渋谷／平日／休日の午後のコンサート」等の自主公演、新国立劇場等でのオペラ・バレエ演奏、『名曲アルバム』『NHKニューイヤーオペラコンサート』『題名のない音楽会』『東急ジルベスターコンサート』『NHK紅白歌合戦』などの放送演奏により、全国の音楽ファンに親しまれる存在として高水準の演奏活動と様々な教育的活動を展開している。海外公演も積極的に行い、国内外から高い評価と注目を集めている。2020～21年のコロナ禍における取り組みはMBS『情熱大陸』、NHK BS1『BS1スペシャル 必ずよみがえる～魂のオーケストラ 1年半の闘い～』などのドキュメンタリー番組で取り上げられた。

1989年よりBunkamuraオーチャードホールとフランチャイズ契約を結んでいる。東京都文京区、千葉県千葉市、長野県軽井沢町、新潟県長岡市と事業提携を結び、各地域との教育的、創造的な文化交流を行っている。

Tokyo Philharmonic Orchestra

In 2022, the Tokyo Philharmonic Orchestra celebrates its 111th anniversary as Japan's first symphony orchestra. With about 160 musicians, TPO performs both symphonies and operas regularly. TPO is proud to have appointed Maestro Myung-Whun Chung, who has been conducting TPO since 2001, as Honorary Music Director, Maestro Andrea Battistoni as Chief Conductor and Maestro Mikhail Pletnev as Special Guest Conductor.

TPO has established its world-class reputation through its subscription concert series, regular opera and ballet assignments at the New National Theatre, and a full, ever in-demand agenda around Japan and the world, including broadcasting with NHK Broadcasting Corporation, various educational programs, and tours abroad.

TPO has partnerships with Bunkamura Orchard Hall, the Bunkyo Ward in Tokyo, Chiba City, Karuizawa Cho in Nagano and Nagaoka City in Niigata.

Official Website / SNS <https://www.tpo.or.jp/>



©上野隆文

役員等・事務局・団友

役員等(理事・監事および評議員)

理事長	理事	監事	評議員
三木谷 浩史	浮舟 邦彦	岩崎 守康	伊東 信一郎
	大賀 昭雄	山野 政彦	海老澤 敏
副理事長	大塚 雄二郎		佐治 信忠
黒柳 徹子	小山田 隆		鈴木 勲
専務理事	篠澤 恭助		鈴木 啓介
石丸 恭一	田沼 千秋		瀬谷 博道
	寺田 琢		日枝 久
常務理事	遠山 敦子		南 直哉
工藤 真実	野本 弘文		
	韓 昌祐		
	平井 康文		
	宮内 義彦		

事務局

楽団長	公演事業部	ステージマネージャー	ライブラリアン	広報渉外部	総務・経理
石丸 恭一	市川 悠一	稲岡 宏司	武田 基樹	伊藤 唯	川原 明夫
	岩崎 井織	大田 淳志		鹿又 紀乃	鈴木 美絵
事務局長	大久保 里香	古谷 寛		千木 加寿子	
工藤 真実	大谷 絵梨奈			二木 憲史	
	佐藤 若菜			星野 友子	
	村尾 真希子			松井 ひさえ	
				安田 ひとみ	

団友

安藤 栄作	大和田 皓	河野 啓子	清水 真佐子	長池 陽次郎	古野 淳
池田 敏美	岡部 純	近藤 勉	瀬尾 勝保	長岡 慎	細川 克己
糸井 正博	小樽 敦子	今野 芳雄	高岩 紀子	長倉 穰司	細洞 寛
今井 彰	小山 智子	齊藤 匠	高野 和彦	新田 清枝	本田 詩子
井料 和彦	甲斐沢 俊昭	坂口 和子	高村 千代子	新田 伸雄	松澤 久美子
岩崎 龍彦	加藤 明広	嵯峨 正雄	竹林 良	二宮 純	湊 貞男
植木 佳奈	加藤 博文	嵯峨 美穂子	竹林 陽子	野仲 啓之助	宮原 真弓
上野 眞行	金崎 真由美	桜木 弘子	田中 千枝	畑中 和子	山屋 房子
生方 正好	川人 洋二	笹 翠	田村 武雄	玻名城 昌子	吉田 啓義
大兼久 輝宴	木村 友博	佐々木 等	津田 好美	福村 忠雄	米倉 浩喜
大澤 昌生	黒川 正三	佐野 恭一	戸坂 恭毅	藤原 勲	脇屋 俊介

〈発行日〉2022(令和4)年9月15日 〈発行人〉石丸 恭一

〈発行所〉東京フィルハーモニー交響楽団

〒163-1408 東京都新宿区西新宿3-20-2 東京オペラシティタワー8F Tel 03-5353-9521 Fax 03-5353-9523

フランチャイズ・ホール: Bunkamuraオーチャードホール 提携: 千葉市 文京区 軽井沢町 長岡市

〈デザイン〉米田デザイン事務所 〈表紙画〉ハラダチエ 〈編集協力〉ひとま舎

〈印刷〉歌文印刷株式会社

©Tokyo Philharmonic Orchestra *無断転載を禁ず(非売品)

演奏会場の感染対策について

演奏会の開催にあたり、リハーサルから本番に至るまで、お客様、出演者、スタッフ等、すべての関係者の安全と健康を最優先に、日本国政府・東京都および関係団体から発表された新型コロナウイルス感染拡大防止のためのガイドラインに従い、舞台上・舞台裏・楽屋・客席ロビーなどにおける対策を講じております。引き続いての感染症予防のご協力をお願い申し上げます。

写真＝三浦興一／上野隆文

客席・ロビーの対策について



入場前の手指消毒、常時マスク着用、間をあけて整列をお願いいたします



入場の際に、サーモグラフィカメラ等での検温を行っています



密集を避けるため、時間差による入退場のご協力をお願いする場合がございます

ご来場者様の中から感染者が発生した場合には、保健所等の公的機関と連携の上、ご購入の際に取得した購入者情報を緊急連絡先として使用させていただく場合がございます。チケットご購入者とはご来場者が異なり、購入者情報を緊急連絡先として望まない場合は、必ずチケット半券裏面の余白にご来場者様のお名前と緊急連絡先(電話番号など)のご記入をお願いいたします。



Face Masks
Required



Physical
Distancing



Sanitizing
Stations



Frequent Cleaning
and Disinfecting



Improved Indoor
Ventilation

会場では常時マスクの着用をお願いいたします。

ロビーや客席内での会話はお控えください。

ロビー等ではお客様同士の間隔を十分におとりください。

頻回の手指消毒をお願いいたします。

場内はスタッフが消毒・清拭を行っています。

客席内は十分な換気を行っています。

時差入退場にご協力ください。



TOKYO PHILHARMONIC ORCHESTRA

SEASON 2022